

第5号 2000(平成12)年3月20日発行

# 沖縄法政研究所報

沖縄国際大学沖縄法政研究所 所長 山城 将 美

〒901-2701 宜野湾市宜野湾2丁目6番1号 電話098-892-1111 内線1321~1322 直通098-893-9023



## ビザンツと現代

渡嘉敷 一郎 所員 (法学部教授)

### コロンブス時代

「後世の歴史家はこの400年をコロンブス時代と呼び、それが1900年ののち、まもなく終焉したと回顧するだろう」

今世紀の初め、イギリスの王立地理学協会で発表したHalford J. Mackinderの論文「歴史の地理軸」の文頭の一節である。同論文の発表された1904年は、日露戦争が勃発し、英仏協商が成立した年である。その2年前には日英同盟が、そして4年前の1900年には扶清滅洋の運動が起こっている。氏は、地理上の発見がほぼ終わったことを以てコロンブス時代の終焉の理由としているが、当時の歴史的变化を敏感に感じ、20世紀を新しい時代の幕開けとしたかったのではなかろうか。

### ビザンツ帝国

コロンブスの新大陸発見(1492)の直前、一つの帝国が滅び(1453)、他方、ロシア大公国のイヴァン3世はタタール人から独立(1480)して後の大帝国の基を築く。コロンブス時代の前兆である。1000余年に亙り異民族の侵入に耐えたビザンツとは如何なる政体であったのか。ビザンツ発展の決定的要素として、オストロゴルスキは「ローマの政治観」、*「ギリシャ文化」*、*「キリスト教の信仰」*の三つを挙げる。これらを手掛かりに、以下、同帝国の特徴を考察しよう。

#### I 政治的伝統

帝国は地上でただ一つ、の意識は長期に亙り東西両ローマに生きていた。統一的法の支配の観念とTetrarchy(4分割統治)また然りである。しかし、当然のことながら、西ローマとは異なる制度も生まれた。その最たるものがThemataである。

#### II 宗教

神とキリストは異質であると主張したアリウス派と、神と子は同質としたアタナシウス派の論争は、一応ニカイア公会議(325年)で解決を見、神と人を分離したネストリウス派はエフェソス公会議(431年)及びカルケドン公会議(451年)で異端とされた。

これらは、東西両帝国が共同で対処した事例であったが、西ローマ帝国が滅びて(476年)後もビザンツではキリスト単性論者とキリスト両性論者の争い、聖像破壊者と聖像崇拝者の争いが長く続き、842年、アモリア朝のテオフィロス1世の死と共にようやく iconoclasm は終息するのである。

これらは単なる神学論争ではなく、皇帝教皇主義、即ち皇帝が総主教の任免権を有し、皇帝の招集する公会議によって正統異端の決定を下すものである以上、そこでは当然皇帝の政治的権威が問われ、地域間の対立を生み、版図の喪失や帝位継承争いにも発展する深刻な事態を招来する性質のものであった。